

『緋文字』邦訳小史

鈴木 進

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の名がわが国で知られるようになってから百二十年以上が経過した。その名前が日本語の文献に初めて登場したのは、一八八〇(明治13)年、中村正直訳『西洋品行論』(Samuel Smiles, *Character*, 1871の翻訳)中の次の一文においてであった。「亜米利加ノ著述家ナル^{ホーソン}荷栄ハ避ケ憶スル性アリテ痼疾トナル⁽¹⁾タリ」。

しかし「^{ホーソン}荷栄」なる名前を目にする以前にも、それとは知らずホーソーンの著作に接する者たちがすでにいた。明治期英学生の間で広く用いられた「パーレー万国史」(Peter Parley's *Universal History*)こそ、実は無名時代のホーソーンの手の加わった書物であったのだが、その事実が知らされるのはずっと後日である。*Universal History*の日本への導入は古く、福沢諭吉が渡米の折持ち帰った教科書類の中にそれがあった。一八六七(慶応3)年のことである。⁽²⁾

ホーソーンの文学作品の翻訳は、一八八九(明治22)年、湘川漁史(大島正健)が“David Swan”を「夢ならぬ夢」として訳したのが最初である。その代表作 *The Scarlet Letter* は一九〇三(明治36)年、富永蕃江(徳磨)により、『緋

文字』と題して、東文館から出版された。本邦初訳である。⁽³⁾

翻訳は通常同時代に生きる人たちのためになされるものと思われる。それではわが国において明治、大正、昭和、平成の時代を通じて、いったい幾種類の『緋文字』が翻訳出版されたのだろうか。筆者の調査では現在までに十四名の訳者により、改訳や出版社を変えた再版を含め、その数は三十二種類にも及ぶことがわかった。このようにホーソーンの紹介、および『緋文字』初訳からほぼ一世紀の歳月を重ね、多数の訳書が存在することは、そこに自ずと『緋文字』邦訳史と呼べるものを形作っているのではないだろうか。歴史の名に価するなら、それに対する評価が必要になろう。

筆者は主として手元の資料を基に、以下の視点から *The Scarlet Letter* 邦訳の歴史を概観したい。初めに、日本で最も普及し、翻訳上の問題を投げ掛けたと思われる三種類（福原麟太郎訳、佐藤清訳、馬場孤蝶訳）について、それら訳者の翻訳姿勢を見てみよう。そのために、訳書に添えられた「あとがき」や「解説」を一種の翻訳論とみなし、それらを資料の紹介を兼ね、敢えて引用する。その上で彼らの考えが実際の訳文のうえにどのように反映されているか検討してみたい。次に、右の三訳書が翻訳出版された昭和初頭という時代の、『緋文字』邦訳史における位置づけを考えることにしよう。そして究極的には、『緋文字』を鍵として、翻訳のあり方について考察し、さらに明治以降の各時代の同訳書の跡づけを通して、ホーソーンが日本でどのように読まれてきたかを探る一助にしたいと願っている。

ナサニエル・ホーソーンという作家も、その『緋文字』も日本人に決して受け入れ易い小説とは言えないのではないだろうか。なぜならホーソーンの扱うテーマや社会、風俗はしばしば日本のそれらと大きく異なっているからである。例えば、『緋文字』に描かれたニュー・イングランドの風土やピューリタニズムにわれわれが親しみ理解する機会が余りに少ないというのがその理由のひとつと考えられる。

しかし時にはその異質性を強調しすぎる日本人のホーソーン観も、時代によって変化が見られる。『緋文字』翻訳者の

一人福原麟太郎はホーソーンの受容に関し、かつて興味深い所説を提起した。その『トワイヌ・トウルド・テイルズ』について述べた文の中で、日本人が繰り返し翻訳してきた物語と、そうでないものがある。そこにひとつの選択基準があった。つまり物語のテーマが「信仰とアメリカの伝説、歴史は除外」し、われわれの先達たちは「ニュー・イングランド的信仰や思想や歴史や国情を学ぼうとしなかった」と述べている。この福原の説が当を得るとすれば、またそれがホーソーンの他の作品にも当て嵌まるとするならば、『緋文字』の物語こそまさに前述の「除外」の対象の最たるものであるまいか。にもかかわらず、『緋文字』はわが国にて翻訳紹介されてから途切れることなく読み継がれてきた、この事実をどう受け止めるべきか。

この問題を考えるにあたり、『緋文字』邦訳の歴史を訳書出版の時期により、便宜上次の四つの時期に区分してみよう。

第一期、一九〇三（明治36）年から一九二三（大正12）年まで（主として抄訳の時代）。

第二期、一九二七（昭和2）年から一九四〇（昭和15）年まで（この期初めに、序章「税関」を含む完訳本と、日本で一番普及した二つの訳書が出た）。

第三期、一九四七（昭和22）年から一九五五（昭和30）年まで（終戦後、それまでの翻訳の再版が出た）。

第四期をさらに二つに分けて、その前半は一九五六（昭和31）年から一九七一（昭和46）年まで（既存の再版に代わり、新しい訳が求められた）。後半は、一九七八（昭和53）年から現在まで、としよう。

限られた紙数の中で右の全部の時代を取り上げるのは困難なので、本稿では、時間の順序を追わず、先に第二期を中心に考えた上で、他の三つの時期との関連を短く述べることにする。

『緋文字』邦訳の歴史において、第二期と位置づけた時期には三人の訳者により四種類の同訳書が出版された。馬場孤

蝶訳『緋の文字』国民文庫刊行会、一九二七（昭和2）年、福原麟太郎訳『緋文字』新潮社世界文学全集、一九二九（昭和4）年、佐藤清訳『緋文字』岩波文庫、一九二九（昭和4）年、そして佐藤清訳改版『緋文字』一九四〇（昭和15）年、がそれである。この時期は関東大震災後の混乱や昭和の大恐慌に始まり、やがて日本は満州事変、日中戦争へと突入していった時代であった。そのような昭和初期という時代はアメリカ文学の翻訳紹介に必ずしも適していたとは思われないが、わが国のアメリカ文学研究の出発点とも言うべき高垣松雄著『アメリカ文学』が出たのも馬場訳『緋の文字』と同じ一九二七年であった。

福原麟太郎訳『緋文字』は、いわゆる昭和初頭の円本時代を飾る新潮社世界文学全集、第一期38巻中、第23回配本として一九二九年に発行された。新潮社は世界の文学の大衆化をスローガンに、大不況の中で五十八万人の購読予約を集めた。日本人にとって必ずしも近づき易いとは思われない『緋文字』が広く知られるようになった理由のひとつに、新潮社世界文学全集にこれが入れたことがあげられよう。

「従来の生硬な翻訳調でなく、美しい日本語」になる『緋文字』の訳者として、東京高師の教壇に立つ福原が選ばれた。後に福原はその時の訳について「ある方が私の訳に手を入れて下さって読みよい訳となって印刷された」と述べている。『新潮社七十年史』によれば、「ある方」とは新潮社社長、佐藤義亮であったと思われる。彼はこの全集の翻訳に關する確固たる方針のもとに、「読んで分かる翻訳文を期し、自らペンをとって訳文に目を通し、校正刷に添削の朱筆をふるった」とある。新潮社版『緋文字』訳は、彼の考え通り、読み易く、現在でも十分に通用する日本語といえよう。

ただし、外国文学の翻訳として、特に晦渋で古風な文体で知られるホーソーンの日本語訳の翻訳の場合、佐藤の行なったことの功罪は一律に断定できない。現に福原自身が戦後の一九五一（昭和26）年に、三笠書房から『緋文字』を出したにあたって、「その昔新潮社へ渡した、もとの譯稿の寫しを取り出して、それを印刷して貰うことにした。（中略）その

初稿の頃、私は一つの實驗みたいなことを志していて、出来るだけ直譯して、しかも譯文になるものをこしらえたいという考えをもっていた⁽⁵⁾。という。それに基づいて出来た三笠版を福原は「直譯本・緋文字」または「逐語譯・緋文字」と称している。福原はさらに続けて「ホーソーンの文章というのは、まことに息が長く、原文の一つの文章をそのまま切らないで、同じ一つの文章に和譯するということは殆ど不可能であろうと思われる」と書いている。それでは福原のその考えが三笠書房版にどのように反映されているか、新潮社版の訳と比較してみよう。第一章「監獄の入口」の冒頭部、一人の女性の処刑を見ようと集まった群衆と牢獄の建物を、ホーソーンは陰うつな文体で描き、これから始まる物語を暗示する雰圍氣作りをしている。先に新潮社版を引用しよう。

顎鬚^{あごひげ}の生えた人々が一群、くすんだ色の着物を着、先の尖った鼠色の丸帽^{かぶ}を被り、それにまた帽子を被つたり被らなかつたりしたいろ／＼な女もまじつて、建物の前に集つてゐた。入口の大扉は、どつしりとした檜材^{ひのき}で、一面に鐵の鉸^{びやう}が打ちつけてあつた。

これに対し、同じ箇所⁽⁶⁾の三笠書房版では次のように改訳されている。

あご鬚の生えた人々が一群、くすんだ色の着物を着て、先の尖った鼠色の丸帽を被つて、それに女も混つている。帽子を被つたのもあり被らないのもある。それが木造の大きな建物の前に集つていた。入口の大扉は、どつしりとした檜材で、一面に鐵の尖り鉸が打ちつけてあつた。

二つの訳文には二十二年という時間の隔りがある。その間には日本語自体の変化と、現代仮名づかい（一九四六年十一月の内閣告示）に従った表記と、旧訳の漢字をかな書きに改めている点、それに伴い振り仮名が取り払われたことについては言うまでもない。われわれの目に付くのは、前述の福原の言う訳文の長さについてである。旧訳が二文であったのを三笠版では短い、四文になっていて、文章の区切り方に変化が見られることである。

外国文の翻訳において、文の区切りの数、区切りの間の文の長さの問題は、わが国では二葉亭四迷以来の古くて新しい課題である。福原の考えは、文の「形」ではなく、二葉亭言うところの「詩想」を重く見る「意識」と呼ぶべき立場になろうか。ところが福原はそれを「直訳」または「逐語訳」と呼んでいるのである。

福原の意味する「直訳」とは、原文のコンマ、ピリオドなどの文の形、さらに一語一語を忠実に訳文に生かす、ということではないらしい。それよりもむしろ、原文の語順通りに、逆流しないで訳し下ろす、ということでないのか。三笠版訳には、先の新潮社で果たし得なかったと思われる福原の「実験」成果が明らかに見られる。それについて第三章「認知」の冒頭部分を引用して、比較してみよう。語順を比べるために先ず原文を掲げると、

From this intense consciousness of being the object of severe and universal observation, the wearer of the scarlet letter was at length relieved by discerning, on the outskirts of the crowd, a figure which irresistibly took possession of her thoughts. An Indian, in his native garb, was standing there; but the red men were not so infrequent visitors of the English settlements, that one of them would have attracted any notice from Hester Prynne, . . .

人々の厳しい観察の^ま的になつていて、この強い意識から、かの緋色の文字をつけた人は、やつと救われた。群衆の外縁の

ところに一つの姿を見つけたのである。彼女の心は否應なしにそれに奪いとられてしまった。アメリカ印度人が、土人の服を着てそこに立つていたのである。然し、土人はこのイギリスの植民地へ餘り稀にはなくやつて来るのであるから、一人土人がいたとてこんな折にヘスタ・プリンの注意を引きつける程ではなかった。

しかし終戦六年後に出た改訳三笠書房版が、必ずしも日本語として新しいという感じを与えないのはなぜか。福原は前述のことばに続けて、「(ホーソーンの文章は)、まことに古風な言い方や漢語めいた措辞を好んで、修飾のことばも多く、文体として翻訳に困難な点がいくつも数えられる。そのような特徴をいかにして邦語に移すことが出来るか……」と書いている。改訳に比べ、二十年以上前の昭和の初めの訳語の方がかえって新しいと感じさせる日本語さえある。その中で目に付くいくつかを、原語、新潮社版訳語、三笠書房版訳語と並べて表にしてみよう。

(原語)

(新潮社訳、昭和4年)

(三笠書房版、昭和26年)

tithing men

相当な暮しをしている人達

十家組

the bar of final judgement

最後の審判の庭

白洲

Heaven

神

大天

in the King's name

「おとなしくしろ」

「上意だ上意だ」

staff

御用棒

十手

well-skilled physician

先生

国手

town beadle

廷丁

走丁

訳語に見られる変化は話しことばにいつそう著しい筈である。翻訳が同時代の人々のためになされるならば、昭和の

初頭の人々の話し方と、その間に大きな戦争を経験した戦後のそれには違いが見られるにちがいない。第二章「市場」の章の中ほど、ヘスターの処刑を見物しながら口にする五十歳代の婦人の台詞を見てみよう。先に昭和二年、新潮社版は

「……正真正銘、聖書にも法律の本にもあるんだからね。かうなれや、この法律を役に立たなかつた判事達は、自分の妻や娘がどんなに墮落したつて、文句は言へないんだ。」

同じ箇所、昭和二十六年、三笠書房版はこうなっている。

「……正真正銘あるんだからね、聖書にも法令全書にも。こうなると、判事らは、その法律を役に立たせなかつたお蔭で、御自身の奥さんや娘さんが、とんだ道行をしても、お念佛を唱えてろだ。」

この「道行」と「お念佛」にあたるところの原文は“Then let the magistrates, ..., thank themselves if their own wives and daughters go astray!”である。

後者の訳文をわれわれが読む時にことばの新しさや古さという問題以外に、日本の伝統文化としての歌舞伎や仏教の世界を連想するのではないだろうか。これらの文字を目にした読者が果たして原作の小説の背景としての十七世紀ニュー・イングランド、ピューリタン社会を思い描くことが出来るのだろうか。

外国文学の翻訳にあたって、外国の事物を日本固有のものに書き換えるべきかどうか、これもまた、古くから問われ

続けてきた翻訳論の課題である。明治二十年代の「小日本語化」翻訳に対して、「単色版的翻訳」の野上豊一郎の主張は、三笠版『緋文字』の訳文に関する限り、福原とは考えを異にしているように思われる。森鷗外も「予なんぞは努めて日本固有の物を避けて、特殊な感じを出そうとしている」と書いている点で、福原の訳文と違うと言えよう。

三笠書房版『緋文字』は、その後、富原芳彰の註を添えた開文社英米文学訳註叢書（一九五三）、さらに白水社世界名作選（一九五四）として出版された。同じ訳が一九五九年に平凡社世界文学全集にも用いられた。ただしこの平凡社版には序章「税関」が加えられている。福原の「税関」訳については後に述べることにして、福原訳『緋文字』は改訳とは別に、旧訳が現在も生き続けている。その系統はもとの新潮社版の訳文が大泉書店（一九四七）、河出書房世界文学全集24（一九五〇）、角川文庫（一九五二）、（同文庫三十版には「税関」訳も付いている）、そして一九九六年には角川文庫リバイバルとして再版された。最初の訳が出てから改訳を含め、八種類の福原訳が七十年間も読み続けられた。このことにより日本の『緋文字』普及と数多くの読者を得たことに繋がったのは間違いない。

福原麟太郎訳『緋文字』の新潮社世界文学全集の奥付によると、発行年月日は昭和四年一月十五日となっている。それから半月後の二月五日に岩波文庫版佐藤清訳『緋文字』が出た。岩波文庫は一九二七（昭和2）年七月に、当時流行の分売を認めない予約出版に対抗し、「万人の必読すべき眞に古典的価値ある書」を安価に民衆の手に届けようとの方針により発刊された。アメリカ文学関係では若松賤子訳『小公子』など数点にすぎなかったが、その中に『緋文字』が加えられた。

佐藤清による『緋文字』は岩波文庫のために新たに翻訳されたのでなかったということが同書「あとがき」によってわかる。それによると佐藤は大正六年に『緋文字』を訳し出版した。大正十五年にはその「訳を全部書きかへ」て、岩波書店から出版するようになった旨が記されている。岩波文庫版、佐藤訳『緋文字』はその後一九四〇年および戦後の

一九五五年、と改訳を重ねている。しかしそれらしいずれの版においても「税関」は訳されなかった。

佐藤の最初の訳は、わが国の『緋文字』翻訳史において、富永蕃江訳に次ぐ二番目に古いものであるが、前者が抄訳ということもあり、佐藤が参考にした形跡はなさそうである。

佐藤が『緋文字』を訳したのは関西学院高等部教授時代であり、年齢的には前述の福原が新潮社版訳をしたのとはほぼ同じ三十歳代初めの訳業であつたろう。佐藤はその「はしがき」の中で「此譯が讀者の満足を買ひ得ないことはよく／＼知つてゐる。(中略)讀者の親切なる助言に依て、更に訂正の機会を得たい」と記している。それでは佐藤の初めの翻訳がどのようなものであつたかを知るために、少し長い引用になるが第六章「パール」の一節を紹介しよう。

この外面の變易性は、パールの内生命の種々な特性の表示であり、又それらの特性の公平な表白以上のことを爲さなかつた。彼女の性質は變化と共に深みもあつたやうに思はれた。しかし(でなければヘスタの恐れがヘスタを欺いたのだが)この子供は生れ落ちたこの世の中に對する託委順應を缺いてゐた。(中略)生れた此子を造りなせる要素は、大方美しく燦爛としてはゐたが、皆全く無秩序か、然らざるも其等の要素獨特の秩序があつたのだ。そのたゞ中に多様と整頓との要點を見出すことは困難であり、困難でなければ不可能であつた。

漢字にはすべて振り仮名が付いているが、日本語としては、大正時代の讀者にとつてもわかり難い文章でなかつたらうか。

やはりこの訳文が生硬かつたというのか、改訳された岩波文庫では次のように大幅に直されている。

このうはべの變りやすさは、パールの内生命の種々な特性を示したもので、又それをよく表はしたといふにすぎなかった。彼女の性質は變化と共に深みもあつたやうに思はれた。だが（でなければヘスタの恐れがヘスタを欺いたのだが）この子供は生れて來たこの世にしつくり合はなかつた。（中略）生れたこの子を造りなした要素は美しくかがやいてゐたが、皆全く無秩序であるか、さうでなければ、それ等の要素獨特の秩序をもつてゐたのである。だから多様なものをどうしてこのやうにつくり上げたか、その要點を見出すことは困難であり、不可能であつた。

もう一箇所、会話体の訳文を見てみよう。第十二章「牧師の徹夜」の中ほど、絶えず罪の意識に苦悩するディムズデル牧師が、ある夜処刑台に立つ場面である。そこをたまたま通りかかったヘスターとパールも共に、三人が立ち並らぶ。パールがディムズデルに向かい、次のように言う。『あなたは^{だいたん}大膽ではなかつた、――眞實^{しんじつ}でなかつた！』。しかし、これが七歳の幼女の使うことばだろうか。この訳は岩波の初版でも全く同じ、一九四〇年の改訂の時に「あなたは勇ましくなかつた――ほんとうでなかつた！」と変えられたものの、幼い子供のことばとしてはまだ不自然さが残つていよう。その感じは何によるのだろうか。翻訳において、特に会話のことばは年齢、職業、風俗などに従つて、使うことばの訳し分けがなされるのが理想である。日本語ではさらに代名詞と敬語と語尾の扱いにより、当事者同志の関係が明らかになるといふ特徴が加わる。「あなた」にあたる原語は“Thou”であるが、日本語ではこのような場合の代名詞は表現しないか、もし訳すとすれば「牧師さま」か「先生」と言うだろう。例えば、昭和三十年代に出た翻訳では「臆病なのね――うそつきなのね！」（太田三郎訳河出文庫、昭和31年）、「牧師さんは気が小さかつたのよ！嘘も言つたし！」（鈴木重吉訳新潮文庫、昭和32年）、そして最も新しい訳、八木敏雄訳、岩波文庫（平成4年）では「牧師さまの弱虫！嘘つき」と訳され、子供らしい、生き生きとした文体になっている。ユージーン・ナイダの“dynamic equivalence”とはこのやうなこ

とを指すのであろう。

岩波文庫に用いられた佐藤の訳は昭和初年の日本語を反映しているのだろうか。同じ年に出た新潮社福原訳（昭和4年）の訳語と比べると多少古い感じがする。大正六年の訳に引きずられたせいであろうか。

原語

新潮社（福原訳）

岩波文庫初版（佐藤訳）

tithing men

相当な暮しをしている人達

町役人

the bar of final judgement

最後の審判の庭

最後の法廷

Heaven

神

神

staff

御用捧

官捧

well-skilled physician

先生

名医

town beadle

廷丁

教区吏

a half holiday

半日休み

半どん

最後にあげた「半どん」はオランダ語“zondag”（日曜日）からきた「休み」の意味で、明治期には普通に使われたが、昭和に入ってから使う人がいたのだらう。

佐藤訳の表記法で目に付く二つの点だけを指摘するにとどめて、次に移ろう。そのひとつは、訳文中に「すっぱり」、「かくきり」、「ぱっちり」など擬態語の類が多く見られることである。そしてもうひとつは、ホーソーンの息の長い原文の中の関係代名詞や同格の節を、丸かっこに括るやり方の、その記号がしばしば読者の目にとまる点である。

佐藤清訳『緋文字』は以上のような特徴をもちながら、最初は日本基督教興文協会から一九一七年に出版され、一九二九年からは岩波文庫となって、一九九二年の八木敏雄訳に取って代わられるまで、七十年以上、長く、広く読み継が

れてきた。しかし佐藤訳のどの版にも序章「税関」は訳されず、八木訳『緋文字』が出て初めて岩波文庫は完全訳を持つことになった。

日本における『緋文字』翻訳について考える時にどうしても取り上げなければならぬのがこの「税関」をめぐる問題である。*The Scarlet Letter* の物語の前におかれ、本文の六分の一の長さをもつ序文“*The Custom House*”を翻訳紹介者がどのように読み、出版社はどのように扱ったのだろうか。筆者の手元にある資料によれば、三十二種類の『緋文字』翻訳本のうち「税関」訳のあるものが十七種類、訳者十四人のうち九人が訳している。それらの中で最初に“*The Custom House*”を「税関」と訳した「完訳」が、一九二七年という早い時代、筆者が翻訳史第二期と位置づけた時期に出たことに注目したい。

訳者馬場孤蝶はタイトルを『緋の文字』として、昭和二年五月に、国民文庫世界名作大観の一冊として出版した。円本時代に国民文庫は予約一冊三円六十銭という価格からいっても、読者層はかなり限定されたものと想像される。叢書第一部、英国篇に限り、日本語訳の後に英語原文も収録されているが、これは英語学習者の便宜をはかってなされたとは思われない。アメリカ人作家からホーソーンの『緋の文字』が選ばれた。

『緋の文字』の序文には、この作品翻訳に対する馬場の姿勢が次のように述べられている。

此の『緋の文字』の譯文だが、少々堅苦しい文體のやうに感ぜられる人があるかも知れぬ。然し、餘まり軽い言葉使ひを用ひては、原文の氣分を損ふことは明白なので、大體かういふ語風のものにした。従つて、元のセンテンスをなるべく割らずに、眞直ぐに縦に譯して行くやうにしたのだ。會話の言葉の如きも、日本語としその寫實的なものにはしないで置いた。

孤蝶の『緋の文字』翻訳論を要約すれば、ホーソーンの文体の特徴を尊重した、ということであろう。この考えが実際の訳文にどのように表われているか、「税関」の中から、後に問題にする“a neutral territory”をめぐる箇所を原文と共に引用しよう。

Thus, therefore, the floor of our familiar room has become a neutral territory, somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other. Ghosts might enter here, without affrighting us.

で、さういふ風で、吾々の居慣れた部屋が實世界と神仙郷との間の何の邊かにある中立地帯——其所では、現實界と想像界とが出會つて、各々が互の本質をば互に吸ひ込み合つて居るといふ場所——になつて了つたのだ。此所へは幽霊が入つて來ても、吾々には別に不思議では無くなつて居るのだから、それに驚きはし無からう。

文頭の副詞“therefore”を「べ」と訳し、“fairy-land”には「神仙郷」を当てている。さらに“where…”以下の節をダッシュを用いて訳し下ろしている。

孤蝶訳出版の二年後に、前述の福原訳および佐藤訳が出たが、そのいずれも「税関」を訳してないのは前にも触れた。福原は新潮社版の「解説」の中で、出版社と相談の結果省いた、と述べている。しかし福原はその後にも「序文」の訳出を心掛けていたらしく、一九四七年の『英語青年』誌上に「税関——緋の文字」の序として」という訳註を連載した。これは数回で休載になったものの、訳本体は完成し、後日角川文庫および平凡社版（一九五九）に完訳を見ることが出来る。

わが国で最初に序章「税関」と本文との関係につき問題提起したのは Kenkyusha English Classics, *THE SCARLET LETTER* (一九二二(大正11)年)だった。編註者深澤由次郎は Introduction の中の「The Custom House」に就いて「本書と餘り密接な関係がないので本叢書には省くことにした」と述べている。このような読み方はその後長く続いて、一九五十年代に入っても変らなかつたらしい。鈴木重吉訳新潮文庫にも、太田三郎訳河出文庫にも序章が入っていない。それは文庫版という制約からでなく、「本文の内容や筋に直接関係がないので」(太田訳河出文庫「あとがき」という理解による。ところが三年後の河出書房新社世界文学全集の時には「税関」―「緋文字」への序―が加えられた。太田はそれを「このような形で本文の物語の発端をみちびくのは、まさにゴシック小説」の手法である、と解説しているのである。

一九八十年代に入りテレンス・マーチンが問題にする“a neutral territory”(馬場孤蝶訳「税関」との関連で引用した三六頁参照)の視点から言えば「場合により読者は、さきに本文全篇を通読し、そのあとでこの「序文」に復られてもよい」(村上至孝訳『緋文字』一九四八「あとがき」ということにはならないであろう。いずれにしても、「税関」の章を読むか読まないかで、本文の理解に大きな違いが生じるのは間違いない。現在出版されている『緋文字』のほとんどが「税関」を含む完全訳である。翻訳者十四人のうち九人の訳が完訳である。それをあげると、馬場孤蝶訳(国民文庫)、村上至孝訳(世界文学社)、泉春夫訳(創人社)、太田三郎訳(河出書房新社)、福原麟太郎訳(平凡社、角川文庫30版)、刈田元司訳(旺文社、主婦の友社)、小津次郎訳(集英社)、工藤昭雄訳(中央公論社)、八木敏雄訳(岩波文庫)、以上である。

ここまで、わが国で最も広く普及したと思われる福原訳および佐藤訳『緋文字』の二種類に加え、「税関」を含む馬場孤蝶訳『緋の文字』を中心に、邦訳上の問題点を考えてきた。昭和初頭のわずか三年の間に、これら重要な翻訳が相次

いで出版されたこの時期を筆者は『緋文字』邦訳史の中の“annus mirabilis”ともよびたい。それではこの時期は邦訳百年史の中でどのような意味をもつのか、その位置づけにつき、全体像を簡単に鳥瞰することにより、本稿のまとめとしたい。

ナサニエル・ホーソーンの名はわが国では明治初期から英語テキストを通して知られていた。文学作品では教訓的な内容の短編物語が選ばれ、大島正健、湖処子、泡鳴などのキリスト者による翻訳が目をひく。The Scarlet Letterの初訳は富永蕃江により一九〇三年『緋文字』のタイトルで出版された。その訳文が漢語の多い文語体訳であるのは原作の文体を意識したことによるのであろう。訳者蕃江（徳磨）は牧師であり、キリスト教の伝道的意図のもと出版であったと思われる。二番目の佐藤清訳『緋文字』は前述の通りで、繰り返しを避けるが最初の訳は「基督教文学の著作領布」事業の基督教興文協会からの出版であった。そして三番目、大正十二年、『スカレット・レター』の訳者、神芳郎もホーソーンの「清教徒精神」や「宗教的色彩」への共感からの翻訳である。このように、『緋文字』翻訳史第一期（一九〇三―一九二三）には、翻訳者も読者もキリスト教の理解者が多かったと言えよう。⁽⁶⁾

しかし昭和初期から始まる第二期（一九二七―一九四〇）には、わが国における英文学からアメリカ文学独立の胎動、また本格的なホーソーン研究が現われ始める。馬場、福原、佐藤の翻訳は、それまでのキリスト教界的雰囲気脱し、世界文学の古典たる『緋文字』として広く受け入れられるようになる過渡期の訳と言えよう。一九三〇年以降、日本は戦争への歩みを始め、その後は岩波文庫佐藤訳の改版が一九四〇年に行なわれただけで、他に『緋文字』翻訳書は出なかった。

第三期（一九四七―一九五五）には、日本の敗戦に伴い、占領軍政策による日本社会のアメリカ志向が起こる。読書界にはアメリカを含めた外国文学への飢えがあり、出版界もそれらの要求に答えようとした。新しいアメリカ文学の翻

訳も行われたが、他方、戦前の翻訳の復刊が多くなされた。福原訳はこの期に、出版社を変えて五種類も出ている。そのような中で新たに二人の訳者による『緋文字』が加わった。村上至孝訳（一九四八年）と泉春夫訳（一九五三年）である。

第四期、前半（一九五六―一九七一）および後半（一九七八―現在まで）。昭和三十年代から四十年代にかけて、わが国の経済復興、高度経済成長の豊かさの中で、大手出版社が次々と世界文学全集を企画した。三十年代には旧稿の訂正訳や同じ訳者のものが名を変えた全集に入れられることもあった。文学全集という性質から『緋文字』も単独でなく、ポーやトウエインなど他のアメリカ人作家・作品と組み合わせられた巻となるが多かった。

第四期後半の時期に入っても世界文学全集の出版が続き、既存の翻訳に代わり新鮮な『緋文学』訳が歓迎されるようになった。新しい翻訳には大学の中堅若手の英米文学教員があたり、『緋文字』は引き続き読者を持ち続けた。第四期前期の訳者には太田三郎、鈴木重吉、刈田元司、大井浩二、小津次郎と大橋健三郎（共訳）、工藤昭雄、そして後半には八木敏雄の名前があげられる。

わが国ではホーソーンの『緋文字』は明治期の翻訳以来、四つの時期を通じて読者を失うことなく、命脈を保ってきた。それは『緋文字』が時代や表面的な異質性を越えて、普遍的な古典として、人々に評価される作品であることの証である、と言えよう。

注

- (1) 佐渡谷重信『近代文学の成立』（明治書院、一九七七年）、五五五頁。
- (2) Fumio Anno, *NATHANIEL HAWTHORNE: The Introduction of an American Author's work in Japan*, (Peabody

Essex Museum, 1993), p.21

- (3) 拙稿「THE SCARLET LETTER 日本における最初の翻訳『緋文字』と富永蕃江」(『湘南国際女子短期大学紀要』第七号、二〇〇〇年二月)、五九〜七四頁。東文館版の訳者は「富永」となっているが、戸籍の表記は「富永」である。
- (4) 福原麟太郎譯『七人の風來坊』(岩波文庫「解説」、昭和二十七年)、一〇九〜一一〇頁。
- (5) 福原麟太郎譯、ホーソーン『緋文字』(三笠書房、「あとがき」一七一頁、昭和二十六年)。
- (6) 佐藤孝己「ホーソーン」(『欧米作家と日本近代文学』教育出版センター、昭和四十九年)、一八七〜一九二頁参照。

参考文献

- 別宮貞徳『英文の翻訳』(スタンダード英語講座(1))大修館書店、一九八三年。
- 「特集 翻訳と英米文学」『英語青年』研究社、一九八一年十二月。
- ユージーン・ナイダ、沢登、升川訳『翻訳―理論と実際』研究社、一九七三年。